

# 中世の寺社参詣と地域権力

——伊予国を中心に——

川 岡 勉

四国遍路は平安期の聖の廻国修行にルーツをもつとされるが、それがどのような経過をたどって近世初期にみられる四国遍路の大衆化を迎えるのか、それを考える上で中世における四国遍路のあり方を探ることは重要な研究課題である。しかし、史料的な制約により中世の四国遍路を正面から論じることはなかなか困難である。ここでは寺社参詣に関わるいくつかの事例を紹介して責めをふさぎたい。

## 1 中世の四国遍路

### (1) 聖の廻国修行

四国は早くから遍歴や巡礼を重ねる修行者（聖と呼ばれる）の仏教修行地であった。代表的な事例が若き日の空海の四国修行であり、「市聖」空也の廻国伝承、「勸進聖」重源や西行の旅、そして「捨聖」一遍の活動であったろう。四国遍路は空海が始めたものでなく、また空海ゆかりの地を巡拝するものでもなく、空海それ自身遍歴する聖の一人であったと捉えられるのである。

もともと四国遍路における信仰は、極めて多様性・複合性を特徴とするものであった。修験・山伏系の山岳信仰、観音信仰・補陀落信仰などと結びつく海洋信仰、念仏系の行者による阿弥陀信仰、高野山に対する信仰、熊野に対する信仰、各種の神祇信仰等々、宗派を超える様々な信仰が構成要素に含み込まれていたとみられる。現在でも、札所寺院は真言宗寺院だけでない。特定の神仏と結びつかないのが、観音信仰に基づいた西国巡礼などとは異なる四国遍路の特徴である。

聖の四国修行を原型に始まった四国遍路は、やがて弘法大師空海への信仰と結びついていく。弘法大師信仰という共通項で結びつけられたことによって、いわゆる聖跡巡礼という特徴を帯びるようになるのである。それでは、いつから四国遍路は弘法大師が始めたと言われるようになったのであろうか。

### (2) 弘法大師信仰の広まり

室戸岬・石鎚山など、8世紀末に空海が実際に修行をしたとみられる場所がいくつかあるのは事実であるが、四国各地に残るほとんどの弘法大師伝承は後世の創作である。弘法大師伝説が地方へ波及し、四国と東国が修行地として強調されるようになるのは、11世紀頃であるという（白井優子『空海伝説の形成と高野山』同成社、1986年）。弘法大師伝承の比較的早い事例として、四国では1066年の讃岐曼陀羅寺の史料、1070年の土佐金剛頂寺に関する史料、さらに1118年の阿波高越寺に関する史料などがあり、弘法大師信仰の広がり的一端をうかがうことができる。

伊予における弘法大師信仰を伝える史料としては、13世紀末に作成された「一遍聖絵」の菅生の岩屋の場面が挙げられる。この場面の詞書を読むと、当地を「観音影現の霊地、仙人練行の古跡なり」とした上で、その由来が語られている。それによれば、安芸国の獵師がこの山で観音菩薩を見出して草舎に安置したこと、2・3年後に再びやってきた獵師が菅生寺を建立し自らは守護神となり野口の明神と称したこと、その後白山大明神が現われて鎮守となったこと、堂舎はたびたび火災に見舞われたにもかかわらず本尊や三種宝物は焼けなかったこと、土佐国の女人が観音の効験を仰ぎて岩窟に籠り仙人となったことなどが記されたのち、最後に「其所に又一の堂舎あり、高野大師御作の不動尊を安置したてまつる」として、この地が「大師練行

の古跡」であることが示されるのである。ここでは、弘法大師信仰は一つの堂舎の由来に関わって附属的に述べられているにすぎない。しかも、それは弘法大師自身を祀る大師堂ではなく不動堂にまつわる伝承であった。中世段階では、菅生の岩屋の聖地性は弘法大師信仰によって語られるものではなかったのである。ところが、近世に書かれた澄禅『四国遍路日記』（1653年）になると、「昔大師此山ヲ開キ玉フ時仙人出テ、我ハ此山ノ主也、ソツジニハ難開ト云」とする遍割岩せりわりの由来が記されている。中世から近世へと移り変わる中で、聖地の性格が大師信仰に収斂する形に変容していることが分かる。

三間町の42番札所佛木寺に残る「佛木寺記録」にも弘法大師伝承が見える。それによれば、大同2年(807)中国から帰国した空海が四国を巡礼して山中で野宿したとき、傍らの楠木に大日如来像を刻み、これがこの寺の本尊となったという。その後、宇和荘の領家西園寺家の菩提道場として佛木寺の御堂が造営されたのは仁治4年(1243)、弘法大師御影堂の造立は建治2年(1276)であったとされる。空海巡礼の記述は史実と認め難く、実際の佛木寺の本尊大日如来像は鎌倉中期のもので「建治元年」の墨書銘があるという。佛木寺は恐らく鎌倉中期に西園寺氏の保護をうけながら寺としての形を整えていったのであろう。空海の御影堂が建てられたのが建治2年であったという記述の真偽は定かでないが、正和4年(1315)に造られた弘法大師像が現存していることからみて、鎌倉後期には弘法大師信仰が広まっていた可能性が高い。

小嶋博巳氏によれば、古代にみられた四国を一巡する遍歴修行が、弘法大師信仰によって統合されたのは中世であり、それは室町期、さかのぼっても鎌倉期であるという。「一遍聖絵」や「佛木寺記録」に書き留められた空海伝承の一端からみて、鎌倉後期は弘法大師信仰にとって1つの画期ではないだろうか。

観応3年(1352)9月15日付の金剛頂寺例秋乞食帳(『土佐国靈簡集拾遺』)には、「大師被成申官符、於伊讚阿土四国留乞食」と記されている。南北朝期には、弘法大師の四国乞食勸進の伝承が、かなりの程度普及していたものと考えることができよう。

### (3) 高野聖の活動

四国遍路が空海に結びつく上で重要な役割を果たしたとみられるのが高野聖である。平安期(994年)の大火による高野山の荒廃を復興するために始まった勸進活動が、高野聖の活動の起点だとされる。彼らは聖としての活動を最も組織的に展開したという。貞応元年(1222)5月12日付の太政官符は、高野山大塔修造を目的とする大法師位良印の勸進活動を許すよう南海道諸国の国司に命じたものである(『鎌倉遺文』2959)。高野聖は、こうした国家的なバックアップをうけながら、諸国を遍歴して勸進活動を展開し、高野山と弘法大師に対する信仰を広めていったと考えられる。

彼らの活動は真言密教をはじめ念仏・時宗・坐禅など多様な要素を包含していたが、とくに鎌倉期の高野山は浄土教的な色彩が濃く真言系念仏聖の活動が顕著であったという。高野聖は勸進を実現するために、人集めのための芸能やパフォーマンス、商いや霊薬の普及など、民衆の中で様々な活動を展開していくことになる。彼らの多面的な活動を通じて、四国遍路は弘法大師信仰へと収斂していったのである。

## 2 高野山参詣と地域権力

### (1) 高野山参詣の広がり地域社会

聖の仏教修行として始まった四国遍路は、中世末には俗人が加わり始める。とくに15世紀末から16世紀初めにかけて(明応・永正前後)、遍路落書や巡礼札が各地で検出される。そして17世紀に入ると、四国遍路は一挙に大衆化し、札所寺院が定まって八十八カ所制が成立するのである。

四国遍路の大衆化以前、高野山参詣は既にかかなり広がりを見せていた。応永21年(1414)の高野山禁制案(『高野山文書』514)には「当山参詣之輩、或任往古之由緒、或随当寺之所縁、可有寄宿之處、於国々宿々、廻秘計引旅人之條、背寺家之捉者也」とされ、とりわけ備前国三石関所にて九州・中国よりの参詣人を賄賂

で誘引する動きが問題視されている。高野山は、参詣人を誘引する者は重科に処すと定めるとともに、旅人に対しても由緒・所縁により寄宿すべきことを求めるのである。

この史料からは15世紀における高野山参詣の広がりがうかがえるとともに、参詣人を争奪する動きが町場において展開していたことが知られる。中世後期は水陸の交通が発達し、各地に地方都市が形成される時期であるが、それと結びつきながら寺社参詣人が増大して、様々な軋轢を生み出していたのである。寺社側は、地域交通路・地方都市の管理・統制を担当する地域権力（その中心的な存在は諸国の守護であったろう）との接触を深めていかざるをえなかったと考えられる。

## (2) 伊予における高野山参詣

中世伊予における高野山参詣の実態を探る重要な手がかりとなるのが、高野山上蔵院文書である。山内譲「中世後期瀬戸内海の高野山参詣」(『瀬戸内海地域史研究』1、1987年)や石野弥栄「伊予河野氏とその被官の高野山参詣について」(『愛媛県歴史文化博物館研究紀要』7、2002年)によれば、応仁の乱前後から河野氏による上蔵院を宿坊とした参詣・信仰が生じており、とくに戦国末期(16世紀)における河野氏3代(弾正少弼通直・左京大夫通宣・牛福丸通直)の時代を中心として、伊予の人々の高野山参詣に関わる上蔵院の史料がまとまって伝来している。

上蔵院文書からは、上蔵院より高野聖が仏具や日用品を携えて伊予に下向して領主たちの間を巡回し、伊予の領主たちは彼ら高野聖を先達に高野山に参詣を遂げ、その際には上蔵院を宿坊とするという関係がうかがわれる。上蔵院とこうした関係に結ばれていたのは河野氏とその家臣をはじめとする伊予の国人領主たちであり、地域的には河野氏膝下である中部伊予を中心に東予の一部を除く伊予全域に広がっていた。

伊予の守護河野氏は、天文13年(1544)に上蔵院に宿坊証文を与え、伊予からの参詣者は上蔵院を宿坊とする旨を伝え、これに背いて他坊へ申し合わせる族は国において堅く罪科に処すと定めた。石野氏は、本来、各領主が独自に行っていた宿坊選定のあり方を改め、分国を統治する守護の立場から河野氏が上蔵院への宿泊を強制したものと捉える。そして、それは高野山側の経済的要請(国内領主たちを檀那とすることによる恒常的・安定的な財源確保)に応えるとともに、領国支配機構を整備して諸勢力への統制強化をはかる政治的意図に起因するとしている。

河野氏が国内領主層の上蔵院宿泊を指定したのは、守護河野氏の国成敗権に基づくものと考えてよからう。伊予の領主たちは、基本的にこの定めに従い上蔵院との関係を深めていくのである。こうした国単位での宿坊指定は、高野山側の檀那獲得の方法とも対応するものであった。伊予に限らず、戦国期の高野山は子院ごとに檀那の縄張り(多くが国単位)があり、各院が僧侶を諸国に派遣する形をとっていたとされる。僧侶たちは檀那に位牌を高野山に安置することを勧めて金銭を寄進させたのである。諸国の守護を中心とする戦国期の地域権力秩序のあり方に対応する形で、寺社参詣のシステムが整えられていったことが分かる。

戦国期は確かな情報を得にくい時代であったが、そうした状況を逆手にとって情報を売り物に動き回る人々がいた。その代表的な存在が高野聖であり、彼らは大名たちの所を転々としつつ、途中で見聞した面白い事柄を語りそれをもとに生計を立てていたとされる(山田邦明『戦国のコミュニケーション』吉川弘文館、2002年)。上蔵院文書からは、伊予国内の領主たちの高野山参詣、大名・領主と上蔵院との音信関係、そして僧侶・聖たちの多面的活動など、戦国期の寺社勢力と地域権力との関わりを示す様々な要素を読み取ることができるのである。

## 3. 厳島参詣と地域権力

安芸の厳島神社は瀬戸内海の海上守護神として広く信仰を集めたが、この神社に残る中世文書の中にも伊予からの参詣者の存在を見いだすことができる。

年未詳5月21日付大内氏奉行人連署状には、これまで厳島社法会の時には伊予衆が参詣してきたのが、広島湾仁保島を拠点とする白井氏ら「諸浦警固衆」による妨害にあい、「近年一円与州船無着津」という事態に陥ったことが示されている。厳島の社家衆は、これを「迷惑」だとして大内氏に訴え、大内氏奉行人がこれを披露したところ、「殊当時御和談之上者、聊不可有其煩之由、被仰出候」と記されている。

同時期の年未詳9月14日付の村上通康書状においては、「近年依物総参詣之衆無之候歟」とした上で、社家の訴えにより大内氏から警固衆へ奉書が発せられたため、伊予衆は以前と同じように参詣を再開することを厳島社へ約束している。

これに対して、9月16日付の白井氏連署状では、「予州舟参詣之時、我等致違乱候之由、被仰出候」と聞き及んだが、これは事実無根であることを主張している。白井氏は、ここしばらく「与州舟」の渡海がないため我ら3人は近頃宮島表の警固を勤めていない、また我らが「警固米」を徴収したために「社参之舟」が相滞ったという事実もないと述べて、詳細は大内氏のいる山口に参上して弁明する意向を厳島社に伝えるのである。

一連の史料からは、戦国期には厳島社法会の際に伊予衆が参詣するということが度々みられたことが読み取れる。村上通康が参詣の再開を約していることからして、参詣者の中心は伊予の海賊衆だったとみられる。通康は来島村上氏の当主であり、伊予の守護河野通直の娘婿となって河野氏家臣団の中で大きな発言力を有していた人物である。通康は厳島に対して「毎事御祈誓之義憑入候」と述べており、厳島社は伊予の海賊衆にとっても信仰の対象だったのである。

ところがこの時期、白井氏ら「諸浦警固衆」（広島湾の海賊衆）との衝突を招いていた。その背景には、大内方と伊予河野方の対立状況があったものと見られる。「近年物総」により伊予衆の厳島参詣が滞ったこと、しかし「当時御和談之上者、聊不可有其煩」と大内氏が白井氏へ命じたという点などから、大内方と伊予河野方の対立と講和という事実が浮かび上がるのである。

大内氏は広島湾の海賊衆に対し伊予の海賊衆の厳島参詣を妨害しないように命じており、海賊衆どうしの抗争が瀬戸内海の秩序を脅かし、守護大内氏による統制を招き寄せる結果に至っていたことが読み取れる。寺社参詣をめぐる各地の紛争は、諸国守護を中心とする戦国期の地域権力秩序のあり方に対応する形で解決されていくのである。

## おわりに

本稿で触れた上蔵院文書にみえる高野山参詣に関する史料、厳島神社文書にみえる厳島参詣に関する史料からは、戦国期の寺社参詣が守護河野氏や守護大内氏などの地域権力による統制をうける形で整序されていたことがうかがわれる。中世にみられる地域権力の自立化という状況が、地域的な宗教秩序とどのように結びついており、さらにそれが広域的な信仰圏や参詣路とどう関連していたか、解明すべき点は少なくない。

四国遍路と高野山参詣は、ともに高野聖が関わっていたとみられるが、両者の巡礼構造はかなり大きく相違する。四国遍路が小嶋博巳氏のいう回遊型（複数聖地型）の巡礼であるのに対し、高野山参詣は往復型（単一聖地型）である。両者の類型上の差異は歴史的にどう関連づけて考えればよいのであろうか。

長谷川賢二「四国遍路の形成と山伏の関係をめぐる覚書」（『瀬戸内海地域史研究』8、2000年）には、「先達が霊場へ檀那を引導する行為は、一霊場への参詣のみならず巡礼行動を誘引する可能性を胚胎していた」という指摘がみられる。長谷川氏は、その意味から四国遍路と山伏の形成する地域的ネットワークとの関係に注目するのである。遍路と巡礼の構造比較という観点をふまえながら、中世の巡礼・寺社参詣の実態について考察を深めていく必要があるだろう。